

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

処女塚

万葉集にも残る悲恋伝説



伝説 乙女塚
万葉集にも残る悲恋伝説

紀行 はかなく悲しい恋物語
・ 菟原のあたり
・ 処女塚
・ 東求女塚
・ 西求女塚
・ 万葉集から

関連情報 用語解説
参考書籍
所在地リスト

処女塚

万葉集にも残る悲恋伝説

遠い昔、六甲山（ろっこうさん）のふもと、ちょうど現在の神戸市灘区（こうべしなだく）のあたりに、菟原（うばら）という村がありました。この村に、それは美しい娘が住んでいたということです。

顔や姿が美しいばかりでなく、娘は心もやさしく、機織（はたお）りがたいへんじょうずでした。人々はうわさを聞いて、ひと目でよいから娘を見たいものだ、訪ねてくるのでした。そうした人々の中に、二人の若者がありました。一人は娘と同じ菟原の村に住む若者。もう一人は、海をわたった向こうの和泉国（いずみのくに）に住む若者でした。

「どうか私のおよめさんになってください。」

二人は熱心にたのみこむのでした。娘の両親も、どちらかがお婿（むこ）さんになってくれたらと思いましたが、娘の心はなかなか決まりません。二人があまりにすばらしい若者なので、どちらを選んだらいいのかわからなかったのです。迷い続けるうちに、娘はだんだんとやつれてゆきました。

一方で若者たちは、何とか娘をおよめさんにしたいと、ますますはげしく競争するようになっていました。そのようすを見ていると、このままでは刀を持ってきり合いを始めてしまいそうです。若者たちが競争すればするほど、娘の心はずんずんとゆく一方でした。そしてとうとう、娘は、近くを流れる生田川に身を投げようとするま

でになってしまいました。

おどろいたのは両親です。

「かわいそうに。そんなに思いつめなくてもいいよ。私たちによい考えがあるからね。」

そういって娘をなくさめた両親は、ふたりの若者を招いて言いました。

「お二人が、娘のことを思ってくださいる気持ちはよくわかりました。けれどもお二人ともご立派すぎて、どちらかを選ぶことができません。そこで考えたのですが、そこに流れている生田川の水鳥を早く射止めた方に、おむこさんになってもらおうと思います。」

どちらの若者も、弓のうでまえには自信がありましたから、この話は願ってもないことでした。弓比べの日をとりきめて、二人は帰ってゆきました。

いよいよ弓比べの日です。うわさがうわさを呼んで、生田川の河原にはたくさんの人が集まりました。りりしく着かざった二人の若者は、河原へ進み出ると、合図と同時に矢をつがえて、弓をひきしぼりました。人々はかたずを飲んで見つめます。娘は手をにぎりしめ、目を閉じました。

ひゅうっと空気を切りさく矢鳴りが、聞こえました。

「わあぁっ。」

「あたたっ！」

「見事だ！」

口々にさげぶ人々の声に、目を開いた娘は、立ち上がって川面を見つめました。そしてどうしたのか、川に向かって歩き始めたかと思うととつぜん走り出し、流れに身をおどらせたのです。

激しい流れにのまれて、娘の姿は二度とかび上がってきませんでした。それを見た二人の若者も、娘のあとを追うように川に身を投げてしまいました。

残された水鳥をみると、二本の矢がつきささっていました。若者たちは、弓の腕前までまったくのごかくだったのです。弓比べでもおむこさんが決まらないと知って、娘は死ぬことを選んでしまったのです。

娘がほうむられた墓を、人々は処女塚（おとめづか）と呼びました。そして、処女塚を見守るように造られた二人の若者の墓は、東求女塚（ひがしもとめづか）、西求女塚（にしもとめづか）と呼ばれています。

紀行「はかなく悲しい恋物語」

菟原のあたり

今の神戸では、もう菟原（うばら）という地名を知る人も、ほとんどいないだろうけれど、菟原郡が地名から消えたのは1896（明治29）年のことだから、ほんの110年ほど前のことである。

現在の芦屋市（あしやし）から、神戸市中央区の生田川（いくたがわ）あたりまでが菟原郡にあたる。六甲山（ろっこうさん）が海に迫り、平地こそ狭いが、畿内と九州を結ぶ山陽道がそのすそ野を通る重要な地域でもあった。



菟原付近のようす（撰津名所図会から）

菟原の乙女の物語は、奈良時代にはすでに伝説になっていたようだが、現在語られる伝説は、平安時代に書かれた『大和物語（やまとものがたり）』が元になっているそう。その物語があまりにも悲しく、胸に迫ることが、千年以上もの間語り伝えられた理由なのかもしれない。現代の菟原あたりは、もう「原」と呼ぶことも思いつかないような都市のまん中で、明るい、乾いた空気に包まれている。

伝説の舞台になった処女塚（おとめづか）、東求女塚（ひがしもとめづか）、西求女塚（にしもとめづか）は、2kmほどおいて等間隔に並んで、どれも古代の海岸線からたいへん近い場所に築かれている。この並びは陸上よりも、海上から見たほうがはるかによくわかったはずである。処女塚伝説を生み出したのは、海から三つの塚を眺めていた人だったのではないだろうか。

処女塚

処女塚は、阪神電車の石屋川駅（いしやがわえき）から、およそ300m西の海岸寄りにある。駅から石屋川に沿って下り、出会った広い道を西へたどれば迷うこともないだろう。大正年間に国の史跡となり、20年ほど前に公園として整備された。

周囲を住宅やビルに囲まれ、古墳の上だけが松の緑に覆われたオアシスになっている。墳丘はきちんと整備されていて散策することができ、東側には田辺福麻呂（たなべのさきまる）の歌碑も建てられている。

処女塚は、古墳時代前期の早い時期に築造された、前方後方墳であるから、それから奈良時代までの400年ほどの間に伝説ができたことになる。墓の主のことが忘れ去られ、いつの間にか乙女の伝説に変わってゆくのに、いったいどれほどの時間がかかったのだろう。



処女塚古墳

東求女塚

阪神電車をさらに東へ乗り継ぎ、住吉駅から東へ歩くと、5分ほどで東求女塚である。元は前方後円墳だったが、明治時代に土取りで破壊されてしまい、後円部だけが公園として残るものの、古墳の面影はほとんどない。埋葬部も消え去り、少数の出土品が伝わるだけである。グラウンドのように整備された広場のまん中に、石垣で円く囲まれた高まりがあり、そこにぽつんと立つ石碑だけが、この場所の由来を知るよすがとなっている。

前方部には幼稚園がある。幼い子らの歓声を聞きながら、墓の主は苦笑いしているかもしれない。



東求女塚古墳

西求女塚

東求女塚に比べて、西求女塚は恵まれていたといえるだろう。阪神電車の西灘駅（にしなだえき）から、およそ150m南東にあるこの古墳は、1986年から13回にわたって発掘調査がおこなわれている。

1993年には多数の副葬品が出土して、古墳時代のごく初期に造られたものだということがわかった。三つの古墳の中では、最も古い古墳なのである。

緑の木に取り囲まれた墳丘は、きれいに整備されている。前方後円墳に見えるように整備されているが、前方後方墳だということがわかったのは最近のことである。



西求女塚古墳

万葉集から

『万葉集』では、3人の歌人が処女塚伝説を詠んでいる。中でも高橋虫麻呂（たかはしのむしまろ）は、伝説の筋書きがおよそわかる長歌を残している。



伝説を語る(播州名所巡覧図絵)



乙女塚と求女塚(兵庫名所図巻)

葦屋の 菟原処女の 八年児の 片生ひの時ゆ 振分髪に 髪たくまでに 並びみる 家にも見えず
 虚ゆふの 隠りてをれば 見てしかと いぶせむ時の 垣ほなす 人の詠ふ時 千沼壮士 菟原壮士の
 伏せ屋焼く 進し競ひ 相結婚ひ しける時は 焼太刀の柄おし燃り 白檀弓 鞆取り負ひて 水に入り
 火にも入らむと 立ち向かひ 競ひし時に 我妹子が 母に語らく 倭文たまき 賤しき我が故
 ますらをの 争ふ見れば 生けりとも あふべくあれや ししくしろ 黄泉に待たむと 隠沼の 下延
 へ置きて うち嘆き 妹が去ぬれば 千沼壮士 その夜夢に見 取り続き 追ひ行きければ 後れたる
 菟原壮士い 天仰ぎ 叫びおらび 地に伏し 牙喫みたけびて もころ男に 負けてはあらじと かき
 佩の 小劔取り佩き ところづら 尋め行きければ 親族どち い行き集ひ 永き代に 標にせむと
 遠き代に 語り継がむと 処女墓 中に造り置き 壮士墓 こなたかなたに 造り置ける 故縁聞きて
 知らねども 新喪のごとも 哭泣きつるかも

(あしのやの うないおとめの やとせごの かたおいのときゆ をはなりに かみたくまでに ならびいる いえにもみえ
 ず うつゆうの こもりておれば みてしかと いぶせむときの かきほなす ひとのとうとき ちぬおとこ うはらおとこ
 の ふせやたく すすしきおい あいよばい しけるときは やきだちの たがみおしねり しらまゆみ ゆきとりおいて
 みずにいり ひにもいらんと たちむかい きおいしときに わぎもこが ははにかたらく しつたまき いやしきわがゆえ
 ますらおの あらそうみれば いけりとも あうべくあれや ししくしろ よみにまたんと こもりぬの したはえおきて
 うちなげき いもがいぬれば ちぬおとこ そのよゆめにみ とりつづき おいゆきければ おくれたる うばらおとこい
 あめあおぎ さけびおらび つちにふし きかみたけびて もころおに まけてはあらじと かきはきの おだちとりはき
 ところづら とめゆきければ やからどち いゆきつどい ながきよに しるしにせむと とおきよに かたりつがむと お
 とめづか なかにつくりおき おとこづか このもかのもに つくりおける ゆえよしききて しらねども にいものごとも
 ねなきつるかも)

何とも悲しい響きの歌である。かがり火の下、この歌を朗々と歌う声を聞いたなら、誰しも涙を流したことだろう。ほかに、田辺福麻呂（たなべのさきまる）、大伴家持（おおとものやかもち）などがそれぞれ長歌と反歌を詠んでいる。はかなく悲しい伝説は、万葉人の心にも響いたのである。

用語解説

【処女塚古墳】おとめづかこふん

神戸市東灘区御影塚町にある、古墳時代前期の前方後方墳。石屋川によって形成された、海岸線に近い砂堆（さたい）上にある。全長70m、後方部幅39m、前方部幅32mと推定されている。

墳丘の整備に伴う発掘調査によって、葺石（ふきいし）の存在などが確認されているが、墳丘は全般に破壊が進んでいるという。後方部中央の埋葬施設は調査されていないが、通常の竪穴式（たてあなしき）石室ではないと考えられている。また、くびれ部に近い前方部で、箱式石棺1基がみついているが、これは古墳築造年代より新しい埋葬である。

出土した土器には、鼓形器台（つつみがたきだい）などの山陰系土器が含まれており、西求女塚古墳と共通する要素として注目される。古墳の築造年代は、4世紀中ごろと推定されている。

【東求女塚古墳】ひがしもとめづかこふん

神戸市東灘区住吉宮町に所在する、古墳時代前期の前方後円墳。住吉川右岸の海岸線に近い平地にある。墳丘の破壊が著しいが、全長約80m、後円部直径47m、前方部幅42mと推定されている。

明治初年までは墳丘が残されていたが、壁土採取のために掘削され、その際に三角縁神獣鏡、内行花文鏡、画文帯神獣鏡などの銅鏡6面、車輪石、鉄刀、勾玉（まがたま）、人骨などが出土した。また1900年ごろにも、2面の鏡片が出土している。こうした破壊の際に、後円部より石材が出土していることから、埋葬施設は竪穴（たてあな）式石室であったと推定されている。

さらにその後、阪神電車による前方部の土取りがおこなわれ、後円部もしだいに削平を受けて、ほとんど痕跡をとどめないまでになった。1982年に前方部の一部が発掘調査され、かつて周濠（しゅうごう）が存在したこと、墳丘に葺石があったことなどが明らかになった。

東求女塚古墳が築造されたのは、出土遺物や前方部の形態などから、4世紀後半でもやや新しい時期とされている。

【西求女塚古墳】にしもとめづかこふん

神戸市灘区都通にある、古墳時代前期の前方後方墳。海岸線に近い平地にある。全長98m、後方部幅50m、前方部端幅48mとされている（発掘調査による復元案による）。

1986年から2001年にかけて、13次にわたって実施された発掘調査によって、その内容が明らかにされた。

西求女塚古墳では、後方部中央に竪穴式（たてあなしき）石室が設けられており、三角縁神獣鏡7面、浮彫式帯鏡2面、画文帯神獣鏡2面、画像鏡1点と、剣、槍（やり）、鏃（やじり）、斧（おの）、ヤスなどの鉄製品などが出土した。また出土した土器の大部分は、山陰系の大型壺（つぼ）、鼓形器台（つつみがたきだい）などによって占められており、西求女塚古墳が山陰地方と深い関連を持つことが明らかになった。

これらの成果から、西求女塚古墳の築造年代は、定型化された大型古墳の出現によって画される古墳時代の初頭、3世紀の中ごろに相当し、古墳としては最古の一群に属すると考えられている。古墳の成立過程や、成立期の近畿・中国地方の政治的関係などを知る上で、極めて重要な位置にある古墳である。

【菟原郡】うばらぐん

摂津国にあった郡のひとつ。現在の芦屋市・神戸市東灘区・神戸市灘区・神戸市中央区東部にあたる。兵庫県成立時にも郡名は存在したが、1896年に武庫郡に編入されて消滅した。

【大和物語】やまとのものがたり

平安時代前期に成立した歌物語。作者は不明。2巻からなり、前半は和歌を中心とした物語、後半は伝説・説話的性質をもつ。

【万葉集の処女塚伝説】まんようしゅうのおとめづかでんせつ

『万葉集』で、処女塚伝説に関連した歌を詠んでいる歌人、および歌は下記のとおり。

高橋虫麻呂（たかはしのむしまろ）の歌

葦屋の 菟原処女の 八年児の 片生ひの時ゆ 振分髪に 髪たくまでに 並びゐる 家にも見えず 虚ゆふの
隠りてをれば 見てしかと いぶせむ時の 垣ほなす 人の誂ふ時 千沼壮士 菟原壮士の 伏せ屋焼く 進し競
ひ 相結婚ひ しける時は 焼太刀の柄おし撚り 白檀弓 鞆取り負ひて 水に入り 火にも入らむと 立ち向か
ひ 競ひし時に 我妹子が 母に語らく 倭文たまき 賤しき我が故 ますらをの 争ふ見れば 生けりとも あ
ふべくあれや ししくしろ 黄泉に待たむと 隠沼の 下延へ置きて うち嘆き 妹が去ぬれば 千沼壮士 その
夜夢に見 取り続き 追ひ行きければ 後れたる 菟原壮士い 天仰ぎ 叫びおらび 地に伏し 牙喫みたげびて
もころ男に 負けてはあらじと かき佩の 小劔取り佩き ところづら 尋め行きければ 親族どち い行き集ひ
永き代に 標にせむと 遠き代に 語り継がむと 処女墓 中に造り置き 壮士墓 こなたかなたに 造り置ける
故縁聞きて 知らねども 新喪のごとも 哭泣きつるかも （巻9-1809）

（反歌）

葦屋の 菟原処女の 奥津城を 行き来と見れば 哭のみし泣かゆ （巻9-1810）

墓の上の 木の枝なびけり 聞きしごと 血沼壮士にし 依りにけらしも （巻9-1811）

田辺福麻呂（たなべのさきまろ）の歌

（葦屋の処女の墓を過ぎし時作れる歌一首併びに短歌）

古の ますら壮士の 相競ひ 妻問しけむ 葦屋の 菟原処女の 奥津城を わが立ち見れば 永き世の 語にし
つつ 後人の 偲びにせむと 玉ほこの 道の辺近く 磐構へ 作れる塚を 天雲の 退部の限 この道を行く
人ごとに 行き寄りて い立ち嘆かひ 或人は 哭にも泣きつつ 語り継ぎ 偲ひ継ぎ来し 処女らが 奥津城ど
ころ 吾さへに 見れば悲しも 古思へば （巻9-1801）

（反歌）

古の 小竹田壮士の 妻問ひし 菟原処女の 奥津城ぞこれ （巻9-1802）

語りつぐ からにもここだ 恋しきを 直目に見けむ 古壮士 （巻9-1803）

大伴家持（おおとものやかもち）の歌

（処女墓の歌に追ひて同ふる一首併に短歌）

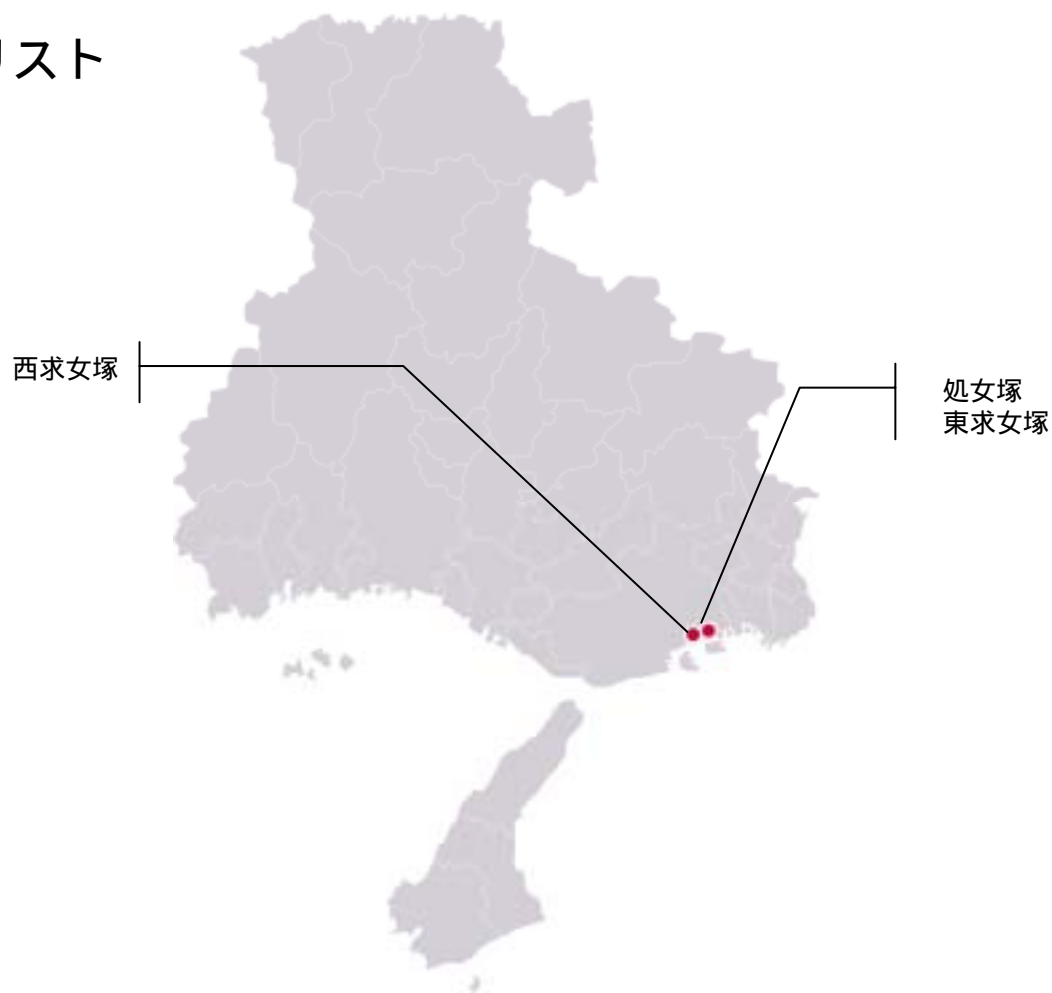
古に ありけるわざの くすばしき 事と言ひ継ぐ 血沼壮士 菟原壮士の うつせみの 名を争ふと たまきは
る 命も捨てて 相争ひに 妻問しける をとめらし 聞けば悲しき 春花の にほえさかえて 秋の葉の にほ
ひに照れる 惜しき 身の壮すら 丈夫の 語いたはしみ 父母に 啓し別れて 家離り 海辺に出で立ち 朝暮
に 満ち来る潮の八重波に なびく玉藻の 節の間も 惜しき命を 露霜の 過ぎましにけれ 奥墓を ここと定
めて 後の世の 聞き継ぐ人も いや遠に しのひにせよと 黄楊小櫛 しか刺しけらし 生ひてなびけり （巻
19-4211）

処女らが 後のしるしと 黄楊小櫛 更り生ひて なびきけらしも （巻19-4212）

参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	新訓万葉集 (岩波文庫)	1927	佐佐木信綱編	岩波書店
	兵庫の民話	1960	宮崎修二郎・徳山静子	未来社
	兵庫のむかしばなし釈講	1978	船知慧	中央出版エージェンツ
	兵庫の伝説	1980	宮崎修二郎・足立巻一	角川書店
	新版神戸の伝説	1998	田辺真人	神戸新聞総合出版センター
歴史・文化等	日本の古代遺跡3 兵庫南部	1984	櫃本誠一・松下勝	保育社
	新修神戸市史歴史編	1989	新修神戸市史編集委員会	神戸市
	兵庫県史 考古資料編	1992	兵庫県史編集専門委員会	兵庫県
	西求女塚古墳発掘調査報告書	2004	安田滋編	神戸市教育委員会文化財課

所在地リスト



処女塚	神戸市東灘区御影塚町2 - 10
東求女塚	神戸市東灘区住吉宮町1 - 9
西求女塚	神戸市灘区都通3 - 6 1

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6 8 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日